

長編心理サスペンス

氷の靴を履く女

新津 きよみ

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編心理サスペンス
こおり くつ は おんな

氷の靴を履く女

著者 ^{にい つ}新津 きよみ

2003年11月20日 初版1刷発行

発行者 八木 沢 一 寿
印刷 慶昌堂印刷
製本 榎本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Kiyomi Niitsu 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73586-X Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

文庫書下ろし／長編推理小説

首吊り判事

京都のテミス女裁判官

わくしゆんぞう
和久峻三



光 文 社

目次

プロローグ

5

第一章 捨てられて

8

第二章 拾われて

70

第三章 選ばれて

120

第四章 囚われて

182

第五章 残されて

232

エピローグ

284

解説

鈴木^{すずき}輝^き一郎^{いちろう}

287

プロローグ

男の視野からは、ある一色を除いて、すべての色彩が失われていた。

彼の目にはいま、モノトーンの街の景色が映っている。景色は次々に、後ろに飛び去っていく。

彼の脳裏に存在する色は、血の赤だけだった。彼が絞め殺した女が流した鮮血の色。

そこから、彼は逃げていた。

——俺おれのせいじゃない。

彼は、必死に言い訳をしていた。自分自身に向かって。

あのマンションに一人暮らしの住人が多いことは、下調べをして知っていた。昼間はほとんど留守であることも。しかし、何度も同じ場所に通っては人目につく。目をつけた部屋の住人が留守かどうかは、最終的には自分の勘に頼る以外にない。そして、彼の勘がはずれたことはそれまで一度もなかった。

——運が悪かったんだよ。女も俺も。

指紋をつけないように慎重にへピッキングして鍵かぎを開け、部屋に入った途端、奥から現れた女と鉢合わせするとは、彼は想像もしなかった。女は一人で部屋にいるというのに、ヘッドホンを耳に当て、音楽を聴いていたらしい。

女の怯おびえた目が彼をとらえた。女はヘッドホンはずし、後ずさった。叫び声を上げられる前に何とかしなければいけない。

「騒ぐと殺すぞ」

脅しの言葉を投げると、女はかすかにうなずいた。

女の目には怯えと同時に、告発の色が宿っているように彼には見えた。彼女の網膜に自分の顔が焼きつけられたのだ、と彼は思った。顔を憶えられた以上、生かしてはおけない。

今回は、何も盗とらなかつた。盗らずに、ただ……殺してしまった。

目の前に、階段が迫っている。

歩道橋だ。

反射的に、彼はステップを上がった。地上を離れば、誰だれも追っては来られない遠いところへ逃げられる。そんな気がしたせいかもしれない。

だが、永遠に上り続けられる階段など存在するわけがない。

足がもつれた。思わず彼は、手すりにつかまった。

色彩を欠いた視野の片隅に、何人かの通行人の姿が入った。

第一章 捨てられて

1

「紀子^{のりこ}さんて……」

自分の名前が聞き覚えのある人間の声で語られたので、松永^{まつなが}紀子は足を止めた。

消毒薬の匂いが漂う病院内の廊下だ。声は、乾燥機が設置されたランドリー室のほうから聞こえてくる。引き戸が開けられたままになっていようだ。こここの扉は、車椅子^{くるまいす}が通れるように開口部が大きくとられている。

「自分のこと、シンデレラだと思ってるんじゃない？」

声の主は、義姉^{しおたにせうこ}の塩谷^{しおたに}節子^{せつこ}だ。

「じゃあ、わたしたちは、いじわるなお義姉^{ねえ}さん二人ってわけ？」

もう一人の声が続いた。節子の妹、小林菊江こばやしきくえの声だ。

「そうなるわね、ブスで足デカの」

二つの中年女性の笑い声が弾けた。

節子と菊江は、紀子の夫、松永雄一ゆういちのそれぞれ嫁いだ姉である。

紀子は、手前の談話室の片隅で息を潜めていた。

「やさしいお父さまが死んだあとに、いじわるな継母ままははと義理のお姉さんがやって来て、自分をこき使い、つらくあたる。なんてひどい女どもだ。あの顔は、そう思っている顔よ」

節子は、手厳しく紀子を批判する。「紀子さんだって、お腹なかの中ではわたしたちに言いたいことの一つや二つ、あるはずよ。それなのに、口答えもせずにくつとこらえて耐えているあの顔、それがなんかこう……ムシズが走るほどカンにさわるのよね。静かな抗議って感じで。言いたいことがあれば言えればいいじゃない。そのくせ、強情で、心の奥底では何かものすごく野心的なことを企たくらんでいそうな気がしない？　そういうところがシンデレラに似てるのよ。魔法の力を借りてまで、舞踏会に行きたがったあの目立ちたがり屋のシンデレラに。家でおとなしくしていればよかったのにさ」

「そう言えばそうだね。少しばかりきれいだと思って、鼻にかけているところも、シンデレラに似ているかもしれない」

菊江が同調する。「シンデレラだって、自分の美貌びぼうがわかっていたからこそ、何が何でも王子さまに自分をお披露目したかったんでしよう？ あの人って、どこか不気味だよ。お母さんの介護も黙々とやってるでしよう？ 一生懸命やってくれるのはいいけど、笑顔も見せなければ、冗談の一つも言わない。くそまじめって言うか、感情がないって言うか……人間味ってものが微塵みじんも感じられないのよね」

「あら、だけど、内心では紀子さん、ラッキーだったとほくそ笑んでるんじゃない？ それで、頬が緩みそうになるのを必死にこらえて、わざとくそまじめな顔をしてるのよ。だって、自宅でお母さんの面倒、看みなくてもよくなったんだもの。こうして病院に入っちゃえば、家にいられるよりずっと楽でしょう？ 自由になる時間だって増えるし、わたしたちだって手があいたときは手伝いに来てやってるんだし。子供がいらないんだもの、子育てを免除されている分、年老いた姑しゅうとめを看みたって罰ばちは当たらないと思うけど」

「そうよね。もとはと言えば、お母さんが足を折ったのも、紀子さんの不注意が原因なんだから。紀子さん、居眠りしてたんですって？ ひどい話ね。あれからお母さん、すっかり弱っちゃったわ。家の中で転ぶなんてね」

「本当にそうよね。お母さんがボケたのだって、紀子さんが家の中のことを何でもかんでもやってしまったからよ。老人には、自分が頼りにされているっていう意識が大切だったのに

ね。それに……」

節子が声を落としたので、そのあとは聞き取れなくなった。

次に耳に入っただのは、節子のこんなフレーズだ。

「……ああ、そうそう、今日、持って来たメロン、高かったのよ。あれだって、お母さんはあんまり食べられないから紀子さんが一人で食べるだろうし」

「ホント、ホント」

紀子は、頬が熱く火照るのを感じながら、きびすを返した。手には、入院中の義母が汚したパジャマを詰めた袋を提げている。毎日、洗うのは紀子の仕事だった。

義姉たちが弟の嫁の自分をシンデレラにたとえているとは、紀子は思ってもみなかった。へやさしいお父さま」というのは、紀子の実父のことではない。紀子の父親は、紀子が高校を卒業する前に病気で死んでしまった。へやさしいお父さま」とは、舅しゅうとのことだった。自宅で寝たきりだった義父、松永優太郎ゆうたろうを看取ってから二年になる。

優太郎は、自分がどんな状態になっても感謝の気持ち을忘れない、心根のやさしい人間だった。「紀子さん、すまないねえ」という感謝の言葉が、さりと口から出た。その言葉を聞くと、紀子はすべての苦勞が報われた気がしたものだ。

ところが、多恵たえは違った。自分も高齢で腰痛がひどいから、と夫の世話をすべて紀子に押

しつけていたくせに、ねぎらいの言葉など一度もかけたことはなかった。それどころか、「嫁がするのは当たり前なんだからね、『ありがとう』なんて言ってもらおうと思ってたら大間違いだよ」と吐き捨てる始末だ。「ありがとう」と一回言ったら一歳寿命が縮まる、とでも言うかのように。

いまでもあのときの衝撃を思い出すと、紀子の背筋を悪寒が這い上る。

あれは、去年の秋。お彼岸が近づいたころだった。

昼ご飯の用意をしていたとき、多恵が台所に入って来てぼつりと言った。

「あんた、どなたさん？」

最初は、冗談を言っているのかと思った。が、その目つきを見て、尋常ではないと紀子は悟った。

七十六歳にして、多恵に痴呆の症状が出始めたのだ。

ちよつと目を離せば、近所を徘徊する。何度、捜し回ったかわからない。紀子は外出もままならず、家で多恵を見張っていないではなくなかった。

多恵は、毎朝毎晩、仏壇に線香を上げる。これだけは、痴呆が進んでも身に染みついた習慣のようだ。火の不始末から火事を出してはいけない、と一度は線香やマッチを隠してしまった紀子だったが、多恵が「ご先祖さまに叱られる」と言って暴れ出したので、仕方なく渡

したのだった。

目を離したすきに外に出られるのを恐れて、紀子は家中に鍵をかけた。多恵が仏壇に近づくと、火を使われるのではないかと思い、そこから彼女が離れるまで見守っている。真夜中に起き出して、「おじいちゃんに新聞、取つて来なくちゃ」と薄暗い中をおぼつかない足取りで玄関に行こうとするので、定期的に多恵の部屋に様子を見に行かなくてはいけない。仕事で朝が早い夫に、多恵の世話を頼むのも気がひけた。

充分、注意していたつもりだったが、四六時中、見張っているわけにもいかない。睡眠不足も手伝って、意識がもうろうとしたような状態になっていた。昨年の暮れのある昼下がり、紀子は、気がついたらダイニングテーブルでうとうとしていた。

獣のような低いうなり声に、ハッと目を覚ました。声は、玄関のほうです。嫌な胸騒ぎがした。あわてて飛んで行った紀子は、三和土^{たき}でうずくまっている多恵を見つけた。

多恵は、あがりかまちにつまずいて転倒、右大腿骨を骨折するという怪我^{けが}を負ってしまったのだ。年寄りの骨は、なかなか元どおりにはくつつかない。歩かないでいる期間が長引けば、それだけ足腰の筋肉は弱る。

それ以降、多恵は家で寝たきりの状態になってしまった。徘徊されるのではないか、火事を出されるのではないか、とハラハラすることはなくなったが、食事の世話をしたり、オム

ツを替えたり、と多恵の介護に一日中、時間をとられるのは同じだった。

介護の日々が半年ほど続いたとき、多恵が軽い脳こうそくを起こした。痴呆のためにつじつまが合わないことは言っても、口だけは達者だった多恵の呂律ろれつが急に回らなくなったのだ。救急車で運び込まれた病院の医師に、「よく気がつきましたね。いつも一緒にいる人でなければ、見逃していたかもしれません」と感心されたほどの小さな症状だったが、MRIで脳の中を見ると、明らかに出血の跡があった。

多恵は、足ばかりか手にもマヒが生じ、言語も不明瞭になった。しかし、もともと喜怒哀楽の激しかった女性である。身体からだは動かなくとも、意味不明の言葉を用いての意思表示はできた。その要求にすぐに応じないと、顔を真っ赤にして怒りを露あらわにした。紀子はほとんど毎日病院に通い、寝返りを打たせたり、身体を拭ふいたり、好物のものを口に運んだり、好きなテレビ番組にチャンネルを合わせたり、と多恵の要求にこたえてやっていた。

笑いかけたり、冗談を言ったりする余裕など、少しもなかったのだ。人間味ってものが感じられないと言われれば、紀子は自分でもなるほど、と思う。一日の大半を気性の激しい姑と暮らすうちに、紀子のほうは自然と無口になったのかもしれない。もともと、義姉たちほど弁が立つようには生まれついていない紀子である。

菊江が言ったように、確かに紀子は、義姉たちにどんなきつい言葉を投げられようと、口

答えをしたことはなかった。それがムシズが走るほどカンにさわると言われて戸惑っていた。義姉二人は紀子にとっては苦手な相手だったが、心の奥底で彼女たちを憎み続けてきたわけではなかった。好きで結婚した夫の姉たちなのだ。同じ屋根の下で夫とともに成長した女性たちだと思えば、不思議な親近感が生まれる。姑のことだって、夫の母親でなければ自分から進んでつき合う種類の女性ではないな、とは思うものの、鳥肌が立つほど嫌いというわけでもない。

——同居している者が、身体の動かなくなった家族の面倒を見るのは当然だ。

——その場合、病人の身近にいて、手があいた者が看護したり介護するのが普通だ。

紀子は、純粹にそう思っていたけな^なのだった。優太郎のときも今回の多恵に関しても。多恵がねぎらいの言葉一つかけてくれないから、介護の手を抜こうと考えたことなど一度もなかった。多恵もまた、松永家に嫁いで来て、数々の苦勞をしたと夫から聞いている。彼女が一人の女として歩んできた人生に思いを馳^はせると、紀子は彼女の人生もまたいとおしいものだと思えてきて、共感がこみあげるのだ。

——シンデレラ、か。

洗面所に入り、鏡に顔を映して、紀子は心の中でつぶやいた。結局、自分の本当の気持ち
は、義姉たちには届いていなかったのだ。